

出会えてよかった

兄が連れてきた女性

私が中学生だったある日、当時、就職一年目の兄がある女性を家に連れてきました。兄はその女性と結婚したいと思っていたのです。しかし、両親は結婚どころか会うことすら拒否したのです。何も言わずにうつむいているその女性の姿は、とても悲しそうに見えました。

それから一年ほどたった頃、その女性が兄の結婚相手の英子さん（仮名）だと紹介されました。英子さんはうれしそうに「よろしくね。」と言ってくれたので、私も照れながら「よろしくお願ひします。」と言いました。

どうして結婚に反対したの？

それから何年も過ぎ、私は大人になりました。その頃には、なんとなく英子さんが「部落」と呼ばれる地区の出身であることを知っていました。生まれた地区やルーツを理由にした差別があること、それを部落差別と呼ぶことを学んでいた私はある日、母に兄の結婚に反対した理由を聞きました。

母の答えはこうでした。

「お兄ちゃんが入社したで、結婚なんて早いってお父さんと話してたの。…でも、ほんとには英子さんの出身のことにこだわってたんだと思う。そんなことで反対したらいけないんじゃないかとも思ってたんだけど…」

「兄の幸せ」より「どう見られるか」が大切？

続けて、母はこんな話をしました。

「お母さんが小さい頃、川の向こうに行かないように言われてたの。今思えば、そこが「部落」と呼ばれる地区だったのかも。でも、そこに行つてはいけない理由を誰も知らなかった。なんとなく、その地区やそこに住んでいる人を避けてたの。だから、英子さんはいい人でも、周りの人にどう見られるかとか、あなたの結婚に悪い影響があるんじゃないかとか心配したのよ。」

だから、そんなに一緒にになりたいなら、二人だけで好きなおところに行つて結婚でも何でもしなさいって言ったの。そしたらお兄ちゃんたちは、自分たちは悪いことは何もしていないって、自分たちのことをわかってほしいって何度も何度も言うの。」

兄が気づいたこと

ある日、兄はそんな両親に、こんな話をしたそうです。

「俺、英子に出会うまで、部落差別に苦しんでいる人がいるってことに気づかなかつたんだ。英子や英子の家族に会ったとき、何も知らない俺を受け入れてくれてるっていうあたたかさと、世の中の偏見や差別に向き合つて生きている強さを感じたんだ。こんな生き方をしている人たちに出会つたのは初めてだったよ。でも、そんな」両親に育てられた英子も、父さん、母さんが俺らの話を聞こうともしないのを見て、泣きながら俺に言ったんだよ。『自分が部落の出身じゃなかったら、あなたにこんな思いをさせなくてよかったのに』ってさ。」

どこで、誰から生まれるかは誰にも選べないだろ。それを理由にした差別があることがおかしいんだよ。昔そうしてたからって、理由もないのに避けたり結婚に反対したりするのは差別だし、そんな生き方は、いろんな人の心を傷つけ続けるんだ。」

二人が教えてくれたこと

「私たちは英子さんっていう人ではなく、『〇〇に

住んでいる人』っていうくくりで人を見てたのよね。あのままだったら、間違つた考えのまま、平気で人を差別する人間として一生を過ごしたと思う。」「お父さんも天国で同じこと思ってるかな？」

「そうね。あの時、お父さんが二人の結婚についてもう一度考えようって言うってくれなかつたら、一歩が踏み出せなかつたかもしれない。何より、お兄ちゃんたちの結婚の話がなかつたら、差別することのおかしさとか、人としての生き方を考えることがなかつたと思う。」

人を生まれた所や住んでいる所で避けたり、傷つけたりする人生が幸せな人生とは思えません。思い込みや偏見にとられることなく、お互いありのままの姿と向き合いながら、つながりをつくっていく、そういう人生を送ることの大切さを、仲睦まじく暮らしている兄と英子さんが教えてくれたんだと思います。

